

ぐるっけ

鈴



平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十二年九月一日発行(毎月一回一日発行)
第十七巻第五号(通巻第一九七号)

ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第197号

9. 2010

玉虫

品川 鈴子

バス揺れの抱き紐嬰のハンモック

開票の勝鬨花火揚がるビル

土砂降りに月下美人は首擡げ

だだ洩りの樋へ薬反り月下美人



剃眉の男子おのこら珊瑚めく水着

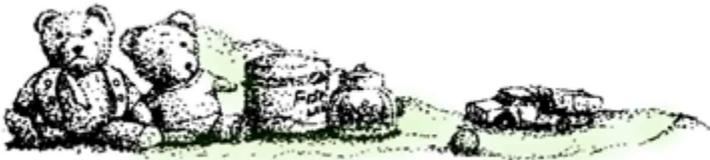
通学せし駅に噴井のとどまらず

玉虫の屍耀ふるルーペの視野

黄金の胸なり城の玉虫は

城に死す玉虫の脚畏まり

秋彼岸句会鞆に数珠ひそめ



玉

鈴

吟

東京 静 寿美子

木道の列の先達道をしへ
遠近に夏うぐひすや行者道
富士樹海入口あたり蛇に会ふ
踏み込めぬ樹海地の底より涼気
水穴を出づれば夏の確かなり

大阪 島 純子

奥河内塀の木目に若葉雨
四阿に老の肩寄す若葉雨
母のもの鉢入れいて夏服に
真田山葉桜被い幼寄る
枇杷の実をつるとむけば滴落つ

香川 島内 美佳

雨多き屋久島滝も多かりき
登山道地獄の一、二、三丁目
青葉山手早き猿の毛繕ひ
呼び込みの声緑蔭の茶店より
連子窓眺む烏城と初夏の庭

大阪 島本 知子

青葉山越えるやいなや鼠捕り
いつの間に足が伸びしや水着の児
夏風邪に休み取らせてもらいけり
淡淡と進む会食作り滝
作り滝後ろ姿はいい男

愛媛 鈴木 てるみ

メーデーの日にも日の丸掲げおり
喜寿なるも虎杖の好き戦中派
予報士が荒れると断言山開き
春寒し腹に痛みを持ちしまま
春北風ならしい主人危篤と呼び出さる

大阪 鈴木 浩子

夏炉焚き爺はおもちやの竹細工
手作りの草餅さげてクラス会
吾に植糸呉れし一畝苺摘み
梅雨兆すポケット隈無くさがしもの
関の声きざみし年輪楠青葉

香川 陶山 泰子

幻の滝と指差す支配人
白滝に向いて隠すものも無し
梅雨出水岩にぶつかり岩に湧く
梶子や薩摩おごじよのおもてなし
築山は御庭の御城つつじ咲く

岡山 瀬口ゆみ子

走り梅雨千古の森に靈氣満つ
他を圧す一枚岩に滝激す
倒木に緑育む苔の層
そよぎては風の色染む若楓
夏つばめつと通り過ぐ能舞台

兵庫 高橋 大三

頭を合せすぐに別るるあめんぼう
あめんぼう時にはうまく逢ひ引きし
梅雨晴間カリヨンの舌動く見え
新緑にカリヨンの音きららかに
梅雨空にカリヨンと音なす連弾

愛媛 武司 琴子

緑蔭に憩ふ庭師の国訛
田植終へ道前平野定まりぬ
転んでもすぐに走る子夏燕
老ばかり話のはづむ溝浚へ
錠剤のころりころげて梅雨明ける

大阪 竹下 昭子

鑑真の廟の辺りに瓊花咲き
木洩れ日が苔絨緞に描く動画
葛城の棚田明るし夏薊
汗しとど作業ズボンはへなへなに
黙々と青梅の帯取る夫

大阪 武田ともこ

筒鳥の声息切れの吾を追ふ
捨て台詞きつぱりと去るほととぎす
仮寝中しかと聞きたりほととぎす
白あぢさゐ峠の茶屋は雨の中
母愛でし香水終の一滴に

愛媛 武智 恭子

山の裾デイゴの紅き花眩し
山独活の大葉若葉の柔らかし
桑の実も色づき初めて病癒ゆ
畑の隅立葵咲き彩放つ
咲き初む梶子の花匂い嗅ぐ

大阪 谷 泰子

河骨は金盃を以て雨受くる
前屈みに上る石段走り梅雨
桐の花地酒に漬けて香にも酔ふ
夕風に震へてをりぬ額の花
見守り隊の老人襲ふ親鴉

薬草歳時記

(二九六)トベラ (海桐)・トビラノキ (扉の木)
市橋章子

海桐爆す嗤ふごと又哭くがごと 林 翔

平成二十年「ぐろっけ」秋季俳句大会が開催されたクルーズで屋久島を訪ねたとき、平内海中温泉に立ち寄った。磯に下りる途中にこんもりとした海桐の木立があり、赤い実が弾けだし、その下には、産卵のため潮待ちしている真赤な蟹が潜んでいた。

海桐はトベラ科の常緑低木で、暖地の海岸近くの照葉樹林の代表的な樹種であり、よく分枝してこんもりと茂り、高さ二〜三メートル、葉は長さ五〜十センチ、中央の葉脈が目立ち、厚く光沢のある革質で縁が裏に巻き込んでいる。

乾燥や病虫害、公害に強いので、庭木、公園樹、生垣、高速道路のグリーンベルトなど都市の緑化に広く使われ、身近にみられる樹木である。

初夏、枝先に白色でのちに黄色に変わる五弁の花を、多数上向きにつける。雌雄異株。果実は球形。熟すと三つに割れて赤い粘り気のある種子をだす。

和名の由来は、枝葉に悪臭があるので、節分の夜に扉にはさんで魔除けとしたことから「扉の木(トビラノキ)」、転訛して「トベラ」になった。

各地の別称もいろいろ。木の葉を火にくべると、バチバチと音を立てることから「バチバチノキ」。燃やすと悪臭を放ち、かまどの神様である三宝荒神が嫌うことから「オコウジンギリ」。他にも、「ナベクダキ」「ナベタタキ」「バリバリシバ」「シマギリ」等々、想像するとなんとなく可笑しい。

薬用部分は枝葉。繁茂している夏季に刈り取り日干しにしたものが「海桐かいたち」になる。

はたけ、しらくもなど寄生性の皮膚病に、「海桐」をよく煎じた液を一日数回塗る。又、通経、解毒、止痛の目的で煎じ液を内服する。家畜の下痢止めにも用いる。

暖地の海岸に自生する樹なので、海辺の景を詠った俳句が多い。花は夏季、実は秋季。

参考文献 「原色牧野和漢薬草大図鑑」三橋博監修(北隆館)

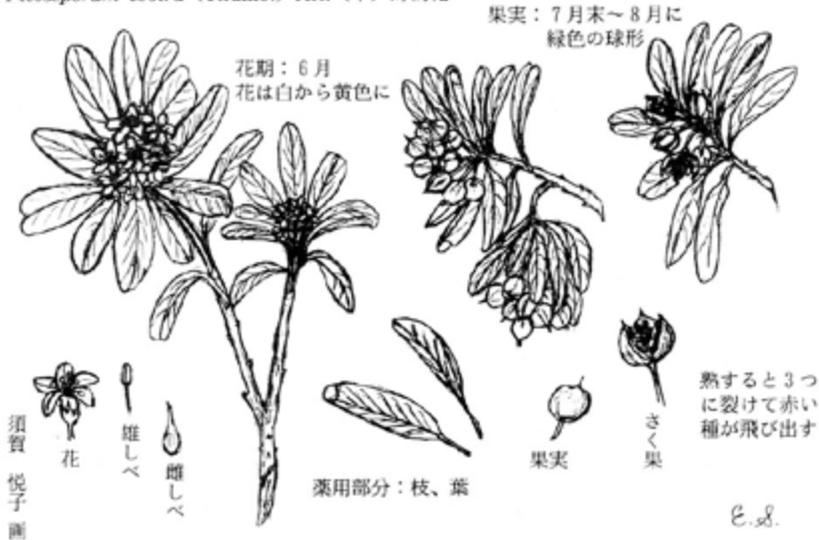
「花歳時記大百科」山田卓三監修(北隆館)

「図説花と樹の大事典」木村陽一郎(柏書房)

著者略歴 神戸薬科大学卒

トベラ 【トベラ属】(とべら科)

Pittosporum tobira (Thumb.) Ait. (中) 海桐花



花とべら志賀島しかのしまけふ波たかき 飴山 實

海の鳥来て巖臙す花海桐 米澤吾亦紅

海桐咲く闇に沖航く船まぶし 河野 南畦

海桐咲き沖曇りくる水族館 柴田白葉女

二枚浪一枚白し花海桐 近藤 一鴻

汐騒の夜の更けて來しとべらの実 坊城としあつ

海桐花咲く海辺に釣果競ひあふ * 片野 光子

名を知らぬ鳥の運びし海桐咲く * 勝野 薫

灯台を猿が覗けり海桐の実 * 塩出 眞一

集落は海へと開け花海桐 * 細野 恵久

(*) ぐろっけ

鈴の奏

品川鈴子選

郭公の棲む森からの小糠雨 兵庫 和賀 俊子

噴上げの豊かなる水古城より
薔薇園をあてなく巡る乳母車

桐の花仰ぎてのちは胸に栖む
更衣夫のはいつちも後回し 香川 石川 裕美

風薫る人慣れの鳩靴を踏む
寝る夫を叩き起こして春炬燵

一斉に脚立広げて実梅採る
宵祭寄つてけ買つてけ飴を切り 兵庫 仲田 眞輔

ためらひつカーネーションを買ふ漢
父の日や誓子の句集遺し征き

姫百合のイナバウアーを大風に
父の日に「若武者」といふ酒もらふ 兵庫 土屋 青夢

介護士に麴ねだる叔母卒寿
五月病に罹らば淡路見よと妣

五月晴昭和八十五年なり
象の鼻牙にあずけて春うらら 大阪 宮村フトミ

春の宵能面に子の泣きだして
掘り上げし筍男ぶり競う

遠足児杖つく人に席ゆずり
夏蝶のドレミドレミときやべつ畑 東京 木野 裕美

更衣して校庭は白の波
余念なき垣根の手入れ薔薇の昼

青梅雨や音なく落つる砂時計
山岳部先づは教はるテント張り 大阪 三井 尚美

豆の飯食ぶ妹の面やつれ
尺取虫見つけ幼の目が点に

開封の破れ付箋に梅雨きぎす
毎年を着廻すだけの更衣 兵庫 中村 碧泉

落人の墓凭れ合ふ木下闇
コーヒ党紅茶党みな新茶汲む

古里の川の笹添へ鮎届き
ベジタリアン値に戸惑いてキャベツ切る 大阪 北川 光子

行燈の青洲生家花は葉に

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評
四句〜十五句 市川 十二代 〃

*選句は全て 品川鈴子

噴上げの豊かなる水古城より

和賀 俊子

古いお城には「打抜き」のたぐいなのか湧き水がたつぷり。水脈の豊かな処は昔も今も変わらず住みやすく、森深い城下にはおのずと人が集まり文化も栄える。古都を支える要はやはり古城の噴上げの水。

一斉に脚立広げて実梅採る

石川 裕美

岡山の後楽園は三大名城の一つ鳥城の聳える美しい庭園として知られる。平城なので籠城の配慮を怠らず糧となるものがそれとなく植えてあり、茶の生垣・蓮池・梅林・御田等々・広大な美観で花見を楽しむ。そして茶摘・蓮根掘・実梅採・田植。稲刈・公園課の行事に市民も加わり、脚立隊の梅挽ぎ。

今秋十一月一日、この後楽園での連句大会に全国からのご参加をお待ちしています。

宵祭りつてけ買つてけ飴を切り

仲田 眞輔

宵祭りの境内では、売り声が飛び交い、お小遣いを握り締めた子らは気もそぞろ。中でも魔法のような飴細工の小父さんは、器用な指先を休めずに、威勢よく啖呵をきる江戸っ子なので大繁昌。

父の日に「若武者」といふ酒もらふ

土屋 青夢

父の日に、お子さんから酒が届いた。働き盛りの息子さんか。しつかり者の娘さんだろうか。父に贈る酒の銘柄にこだわった。「若武者」には、「まだまだ元気で強い父親であつてほしい」との思いがこめられている。

お子さんの茶目つけたつぷりのメッセージに青夢さんの顔もにやりとほころぶ。父の日に、何よりの贈り物となつた。

遠足兎杖つく人に席ゆずり

宮村フトミ

杖つく人は、高齢者が足が不自由な人か。揺れる乗り物

の中で立つのも危なっかしい。

そんな人をいち早く見留めた子供が席を譲った。「今日はどこへ行くの」「遠足」。譲られた人と児童とのささやかなやりとりが目に浮かぶ。乗客に笑顔が広がったことだろう。

更衣して校庭は白の波

木野 裕美

制服を採用する学校では、衣更の時期、景色ががらりと変わる。

友達と連れ立って、次々に登校する生徒たちを詠んだものか。あるいは、全校生徒が運動場いっぱいに広がりラジオ体操をした昔を懐かしんだのかもしれない。

清潔なシャツやブラウスを身に付けた若者の生命力あふれる活動を白の波と表現した。

尺取虫見つけ幼の目が点に

三井 尚美

木枝に擬態する尺取虫は、まさに枝そのものである。枝かと思われたものが突然動き出した。初めて目にする生き物の懸命でどこかユーモラスな姿に幼子の目は釘付けだ。

小さな虫の動きに驚くお孫さんの表情が見えるような句

である。

古里の川の笹添へ鮎届き

中村 碧泉

水苔を食んで成長する鮎は、一種の香気があり「香魚」とも呼ばれる。

その鮎が笹に包まれて届いた。笹の青さと鮎から立ち上る古里の水の匂いに、生まれ育った郷里を思い起こしたに違いない。贈り主への感謝あふれる一句となった。

草笛をリュック投げ出し子ら習う

北川 光子

草笛は、葉一枚の素朴な楽器である。息の強弱や唇の当て具合を工夫し、簡単な曲を奏することもできる。

山道を歩くうちに、年長者がおもむろに道端の草を取り吹いてみせた。一枚の葉から生まれる響きに、子供たちは魅せられる。挑戦するがなかなか良い音が出ない。年長者を囲み、熱心に習う子供たち。その周りには、投げ出されたりリュックがころがっている。